LONDON, NEW YORK,
MELBOURNE,
MUNICH, AND DELHI

A DORLING KINDERSLEY BOOK

www.dk.com

Original Title: The Religions Book

Copyright © Dorling Kindersley Limited, 2013

Japanese translation rights arranged with

Dorling Kindersley Limited, London

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

For sale in Japanese territory only.

Printed and bound in China

執筆者

シュラミット・アムバル

ロンドンのレオ・ベック・カレッジで修士号を取得し、また、2004 年にはラビに叙階される。現在は同カレッジで、パストラルケアとラビ文学についての講義を行う。

マーカス・ウィークス

哲学を学び、教員職を経て、作家・音楽家として活動する。『哲学大図鑑』（三省堂）を始め、美術、通俗科学、思想に関する多くの本の執筆に加わる。

マイケル・クーガン

アメリカ合衆国の聖書研究の第一人者の一人。ハーヴァード大学セム博物館編集長。ハーヴァード大学神学大学院講師で、旧約聖書とヘブライ語聖書についての講義を行う。著書多数。

アンドリュー・ストバート

メソジスト教会の牧師。ロンドン神学学派、ダラム大学、アバディーン大学の博士課程でキリスト教神学を学ぶ。その後、教会の歴史や聖書など、キリスト教神学の分野において、執筆活動と指導を行う。

チャールズ・タイソン

バーミンガム大学にて、中世におけるイスラム教徒とキリスト教徒の関係についての論文で博士号を取得する。現在はイスラム教研究の研究員・外部教授。専門は、イスラム教、キリスト教徒とイスラム教徒の関係、信仰の自由。

メル・トンプソン

学士号・修士号（哲学）・博士号を持ち、宗教学の講義を行っていた。現在は、哲学、宗教学、倫理学に関する執筆活動を行う。著書多数。

イヴ・レバーヴィー・ファインシュタイン

カリフォルニア州パロアルトにて、執筆活動、編集、指導を行う。ヘブライ語聖書を専門とし、ハーヴァード大学で博士号取得。ジューイッシュ・アイディアズ・デイリー等にも寄稿。

ニール・フィリップ

神話学・民俗学に関する著書多数。オックスフォードとロンドンの複数の大学で学び、博士号を持つ。現在はいずれにも所属せず、作家・学者として活動する。

ポール・フリードマン

ブリストル大学で物理学を、ケンブリッジ大学で教育学を学ぶ。教員職を経て、ロンドンのレオ・ベック・カレッジにてラビの叙階を受け、また、ヘブライ語とユダヤ関連の研究で修士号を取得。

監修者

島薗　進〔しまぞの・すすむ〕

東京大学名誉教授。上智大学神学部特任教授・グリーフケア研究所所長。『スピリチュアリティの興隆』（岩波書店）、『宗教学の名著 30』（ちくま新書）、『日本仏教の社会倫理』（岩波書店）ほか著書多数。

中村圭志〔なかむら・けいし〕

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。宗教学者・編集者・翻訳家。『教養としての宗教入門』（中公新書）、『信じない人のための〈宗教〉講義』（みすず書房）ほか著書・訳書多数。

訳者

豊島実和〔とよしま・みわ〕

東京大学大学院総合文化研究科博士課程後期満期退学。現在、東京外国語大学、昭和大学ほか講師。専攻は英語学。英和辞典編集委員も務める。訳書に『政治学大図鑑』（三省堂）がある。

目次

10 **はじめに**

原初の信仰
先史時代〜

20 **目に見えない力が働いている**
世界を理解する

24 **岩にも魂が宿る**
初期のアニミズム

26 **特別な人間は異世界を訪れることができる**
シャーマンの力

32 **なぜ我々はここにいるのか**
創造された目的

33 **なぜ我々は死ぬのか**
死の起源

34 **永遠とは今である**
ドリーミング

36 **祖先が我々を導いてくれる**
死者の魂は生き続ける

38 **我々は善良でなければならない**
調和の中で生きる

39 **万物はつながっている**
神々との生涯の絆

40 **神々は血を求める**
供犠と血の捧げもの

46 **我々は聖なる空間を作ることができる**
象徴主義が現実を作る

48 **我々は宇宙と調和している**
人間と宇宙

50 **我々は神に奉仕するために存在する**
儀礼を行う責務

51 **我々の儀礼が世界を支える**
儀礼による命の再生

古代の信仰と古典的信仰
紀元前3000年〜

56 **神々と人間の序列が存在する**
新しい社会のための信仰

58 **オシリスの王国で永遠に続く素晴らしい生活**
死後の世界への準備

60 **善が悪に勝利するかどうかは人間次第である**
善と悪の戦い

66 **宇宙の道を受け入れる**
自己を道と調和させる

68 **五つの大いなる戒め**
苦行が霊的解放への道である

72 **徳は天から授けられるものではない**
知恵は君子に属する

78 **神の子が生まれる**
神話の融合

79 **巫女は神々の意志を語る**
未来の予言

80 **神々は我々に似ている**
信仰は社会の反映である

82 **儀礼が我々と過去をつなぐ**
神々の道を生きる

86 **神々は死ぬ**
世界の終末

ヒンドゥー教
紀元前1700年〜

92 **供犠によって、我々は宇宙の秩序を維持する**
合理的な世界

100 **神には女性の面がある**
偉大な女神の力

101 **導師の傍に座れ**
高次の教え

102 **ブラフマンは心の中の自己である**
究極の真理

106 **我々は学び、生活し、退き、去る**
四住期

110 **殺すことがあなたの義務かもしれない**
無私の行為

112 **ヨーガは魂の解放への道である**
肉体的·精神的鍛練

114 **日々の儀礼によって神々と話す**
プージャーによる礼拝

116 **世界は幻影である**
純粋な意識で見る

122 **数々の信仰、数々の道**
神を意識する

124 **非暴力は強者の武器である**
政治的時代のヒンドゥー教

仏教
紀元前6世紀〜

130 **中道を見出す**
ブッダの悟り

136 **苦しみには終わりがある**
永遠の繰り返しから脱する

144 **金の質を吟味するようにブッダの言葉を吟味せよ**
個人的な真理の探究

145 **戒律は必要である**
受戒·出家の目的

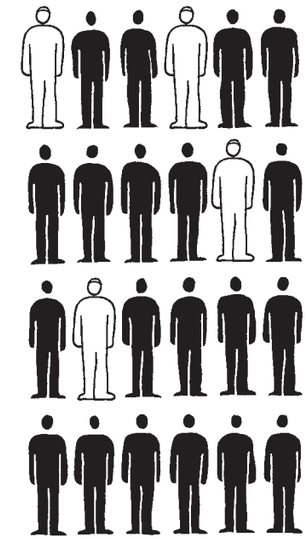
146 **殺生をやめれば善意が生まれる**
思いやりと慈悲による統治

148 **人が何であるかを言うことはできない**
絶えず変化する自己

152 **悟りには多くの相がある**
諸々のブッダと菩薩

158 **信仰を身体に現せ**
儀礼を繰り返し執り行う

160 **自分の中にブッダとしての本性を見出す**
言葉を超えた禅の洞察



ユダヤ教
紀元前2000年〜

168 **あなたたちを私の民とし、私はあなたたちの神となろう**
神とイスラエル人の契約

176 **私のほかに神は存在しない**
拝一神教から一神教へ

178 **メシアがイスラエルを救う**
新しい時代の約束

182 **宗教の戒律は日常生活にも適用できる**
口伝律法の文書化

184 **神は実体を持たず、不可分で、唯一無二の存在である**
定義できないものを定義する

186 神と人類は
宇宙をさまよっている
神秘主義とカバラー

188 聖なる輝きは
すべての人に宿る
神は人の中に現れる

189 ユダヤ教は
国家ではなく宗教である
信仰と国家

190 過去から学び、現在に生き、
未来のために働きなさい
進歩主義ユダヤ教

196 もしあなたが望むなら、
それは夢ではない
近代の政治的シオニズムの起源

198 ホロコーストの間、
神はどこにいたのか
契約への疑念

199 女性もラビになることができる
ジェンダーと契約

キリスト教
1世紀〜

204 イエスは終わりの始まり
全世界へのイエスのメッセージ

208 神は我々のために
一人息子を送った
イエスの神性

209 殉教者の血は教会の種
教えのために死ぬ

210 肉体は死んでも
魂は生き続ける
キリスト教における不死

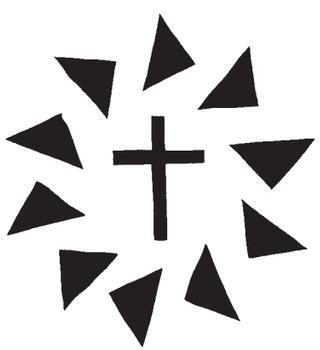
212 神は三であり一である
三位一体

220 神の恩寵は
決して失敗を犯さない
アウグスティヌスと自由意志

222 この世界にありながら、
この世界に属さない
人々のために神に仕える

224 教会の外に救いはない
信仰に入る

228 これは私の体、
これは私の血である
聖体（聖餐）の秘跡



230 神の言葉に仲介者は必要ない
プロテスタントの宗教改革

238 神は心の内に隠されている
キリスト教の神秘体験

239 魂と同様に
体も救いを求めている
社会的ホーリネスと福音主義

240 科学的な発展は
聖書を否定するものではない
近代の挑戦

246 我々は神に
影響を及ぼすことができる
なぜ祈りは通じるのか

イスラム教
610年〜

252 ムハンマドは
神の最後の使徒である
預言者とイスラム教の起源

254 コーランは天から与えられた
神の言葉と意志

262 イスラムの五行
主要な信仰行為

270 イマームは
神に選ばれた指導者
イスラム教シーア派の誕生

272 神はシャリーアによって
我々を導く
調和のとれた人生への道

276 我々は神について
考えることはできるが、
理解することはできない
イスラム教の神学的な見解

278 ジハードは
我々の宗教的な義務である
神への信仰を深める努力

279 この世界は
神への旅路の1段階だ
正しい人々への究極の報い

280 神は無比の存在である
神の唯一性が必要

282 アラブ人、水差し、
天使はすべて我々自身である
スーフィズムと神秘主義

284 後に現れた新たな預言者
アフマディーヤの起源

286 イスラム教は
西洋の影響を脱するべきである
イスラム復興運動

291 イスラム教は
現代的な宗教となることが
できる
信仰の適合性

近代・現代の宗教
15世紀〜

296 我々は聖戦士として
生きなくてはならない
シク教の行動規範

302 神へと続く我々の道は
万人に開かれている
階級制度と信仰

304 故郷へのメッセージ、
故郷からのメッセージ
アフリカ起源のサンテリア

306 「イエス様ならどうなさるか」
と自問せよ
キリストに倣う

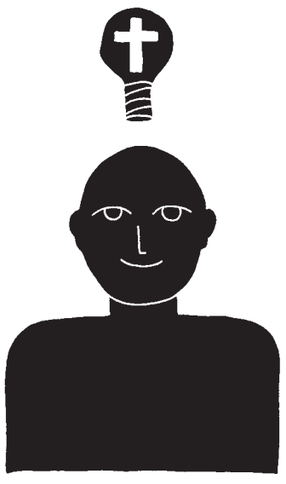
308 我々は死者を通して神を知る
バハーイー教の啓示

310 罪の埃を払う
天理教と陽気ぐらし

311 これらの贈り物は
我々のためのものに違いない
太平洋諸島のカーゴ・カルト

312 すべての宗教は同等である
カオダイ教は
全信仰の統合を目指す

313 私にとって
真実であることが真理である
すべての信仰を受け入れる信仰



宗教・宗派解説

316 宗教解説
318 ヒンドゥー教の宗派
320 仏教の宗派
322 ユダヤ教の宗派
324 キリスト教の宗派
328 イスラム教の宗派
330 その他の宗教・宗派
335 日本の新宗教

参考資料

338 用語解説

344 索引

351 出典一覧
352 監修者・訳者あとがき

自分の中にブッダとしての本性を見出す

言葉を超えた禅の洞察

背景

主な出来事
禅宗の発展

時代と場所
12～13世紀、日本

前史
紀元前6世紀頃　瞑想により洞察力を得て悟りに至ることができると、ブッダが説く。

6世紀　仏僧菩薩達磨が中国に瞑想仏教（禅）をもたらす。（少林寺において武道の修行が始まったのはこの時以来であるとされる。）

後史
1950年代～1960年代　禅思想が欧米の対抗文化において人気を集める。ビート詩人たちの作品や、ロバート・パーシグの『禅とオートバイ修理技術』が有名である。禅の瞑想を行うグループが数多く現れ、カリフォルニアに初めて禅寺が建てられる。

禅とは「瞑想」という意味である。仏教の禅宗は、インドの僧侶である菩提達磨（ボーディダルマ）が開いたものと一般に考えられており、達磨本人がそれを520年に中国に伝えたとされている。達磨によれば、禅とは「文字によらず、教説とは別に、覚醒した意識を直接伝えること」である。

この定義には、禅の重要な特徴が表れている。それは、「禅とは、心を浄化した結果として、自然に悟りの境地に達することを促すものである。その過程において、理屈による議論、文献、儀礼は必要としない」というものだ。これはつまり、禅とは、人間の心の中の混乱を直接的な洞察に置き換えることができるような状況を作り出すものだ、ということである。そのような混乱を抱えていると、人間の精神は澄み切った状態に到達することができないためだ。

禅は仏教の初期の教えを直接受け継ぐものであると禅者は主張する。ある伝承によれば、ある日のこと、ブッダが、弟子に囲まれている際に、一輪の花を手に取り、何も言わずにその花を手の中で回した。すると、弟子の一人である迦葉がほほ笑んだ。迦葉にはブッダの真意が理解できたのだ。このような言葉を介さない洞察が、師から弟子へと、28世代にわたって伝えられたと言われており、28世代目に達磨が受け継ぎ、中国へと伝え、そこから日本にも伝播したのだとされる。したがって禅宗は、仏教の二大宗派である上座部仏教と大乗仏教（320ページ参照）から生まれたものではなく、仏教の初期の教えから独自に発展したものであると、禅者は主張している。

参照：自己を道と調和させる 66–67 ■ スーフィズムと神秘主義 282–83

言葉を使うこと（祈りでも議論でも）は、**我々の心に混乱を生み出す**。

↓

思考や黙読は、**頭の中**により多くの「**言葉**」を生じさせるだけである。

↓

答えや洞察力を追い求めると、**その欲求により心が曇る**。

↓

仏陀の資質を見出そうと望むのであれば、それらすべてを排し、**心を無にしなくては**ならない。

↓

心を無にすることで、言葉を伴わない**洞察と理解**とが、我々にもたらされる。

ブッダの心

「人間は不変の自己を有している」という思い込みによって、この世で生きることが辛くなるのだというのが、仏教の中核となる考え方である。不変の自己が世界の他のものから独立して存在しつつも、他のものに執着し、常に変化する物事を同じ状態で留めておきたいと願ってしまうのだと考えられている。

禅においては、そのような考え方は視野が狭く表面的な「小さな心」であるとされる。確かに人は、生まれたときからそのような考え方を持っており、周囲の影響を受けて、その考え方をより強めていくものである。しかし同時に、人には「ブッダの心（仏性〔ぶっしょう〕）」というものも備わっているのだと、禅宗では考える。仏性とは、

西田幾多郎（にしだ・きたろう）

日本人哲学者西田幾多郎（1870～1945年）は、禅宗と西洋哲学史とを学び、仏教徒という立場での洞察を、西洋哲学の用語を用いて表現しようとした。彼は1910年から1928年まで京都大学で教鞭をとっており、「京都学派」を形成した。

西田は、主体と客体、自己と世界が分離する前に、純粋な経験が生じると論じた。この主体と客体といった対比は、禅において「自我を基盤とする心」と「（左側の本文参照）未分化な統一体としての仏性」とを対比させるのと全く同じ分け方である。西田は、この分け方は、ドイツ人哲学者イマヌエル・カント（1724～1804年）の示した区分とも類似すると述べている。カントは、物体に関する人間の経験（現象）と物体そのもの（物自体）とを区別し、後者（物体そのもの）は認識することができないと論じた。西田はまた、実在や我々の「真の自己」の基礎として神の概念を導入した。そして禅を、ハイデガー、アリストテレス、ベルクソン、ヘーゲルの思想と比較してみせたことでも知られている。

主著

1911年　『善の研究』

背景

主な文献
ムハンマドのハディース（言行録）

時代と場所
7世紀初期、アラビア

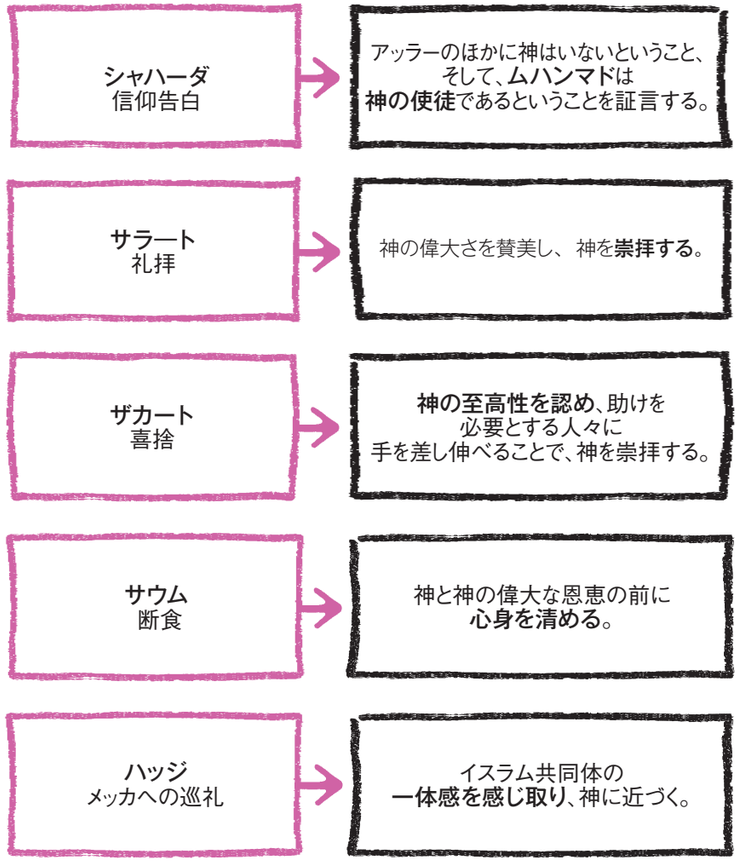
前史
紀元前1000年～　トーラー、次いでタルムードによってユダヤ教徒としての生活の規則が定められ、神とイスラエル人との契約の一部が形成される。

1世紀　キリスト教がユダヤ教の契約（特に十戒）を取り入れる。

610年　預言者ムハンマドがコーランの啓示を受け始める。

後史
680年　イスラム教シーア派が追加の「行」を導入し、信仰と慣例の指針とする。

8世紀　イスラム法を研究する学派が発展し、イスラム教徒の生活や信仰の実践の指針となる解釈をもたらす。



アブドゥッラー・イブン・ウマル・イブン・アル＝ハッターブ（ムハンマドのもとでイスラム教の指導者となった人物）が語ったところによると、ムハンマドは、イスラム教とは5つの原則に基づいた宗教だと述べたという。その5つとは、「アッラー以外に神はなくムハンマドは神の使徒であると証言すること、忠実に完璧に祈りを捧げること、定められた喜捨を行うこと、メッカへの巡礼を行うこと、それにラマダーン月に断食を行うこと」である。

これらの原則をイスラム教徒は「イバーダート」（「神への奉仕」）と呼び（一般的には「イスラムの五行」として知られている）、イスラム教のあらゆる宗派において、信仰の核として受け入れ、実践している。

信仰の告白

宗教としてのイスラム教のすべてを要約しているとは言えないとしても、この「イスラムの五行」には、イスラム教徒が従うべき最低限の義務が示されている。イスラム教では、宗教的な規定の重荷を背負わずに神に従うべきだと考えられているため、この五行はわかりやすさに主眼がある。コーランにも書かれているように、「（神は）この宗教を信仰するせいで、あなた方に負担をかけるようなことはしない」のである。このことを念頭に置いた上で、イスラム教の教義の中心である最初の行を読むと、「真の神が唯一であること、使徒ムハンマドが無二の立場にあることを、単純に認めよ」ということが書かれている。これは信仰の告白であって、シャハーダ（「証」）と呼ばれ、イスラム教徒となるための唯一の手段である。イスラム教徒は生まれたときと、死ぬときに、耳元でシャハーダをささやかれる。また、一日を通して、祈りを捧げるたびに繰り返し唱える。シャハーダは簡潔なものではあるが、2つの重要な内容を含んでいる。1つ目は、神が唯一であると証言することである。これはまさに、イスラム教の中核的な教義の一つ（タウヒード〔「神の唯一性」〕）である。同時に、このように証言することで、多神崇拝（複数の神を信じること）や神以外のものを崇拝することが、イスラム教においては罪になるということを確認する意味合いもある。

シャハーダの後半部分に含まれる2つ目の内容は、ムハンマドが神の預言者であり、しかも、彼より前に現れた預言者たち以上の使命を帯びた特別な預言者であるというものである。ムハンマドは、更に、最後の預言者であるとされている。

参照：儀礼を行う責務　50 ■ 苦行が霊的解放への道である　68–71 ■ 拝一神教から一神教へ　176–77 ■ 口伝律法の文書化　182–83 ■ イスラム教シーア派の誕生　270–71

イスラム教徒の子供は、誕生すると耳元で信仰の告白（シャハーダ）をささやかれる。またアラビアの昔からの習慣に従って、今でも赤ん坊の唇に蜂蜜を塗る人が多い。

礼拝の義務

イスラムの五行の2つ目は、サラート（礼拝）である。イスラム教徒が、個人的に祈りを捧げたり、神に願いをきいてほしいと頼んだりすることもあるかもしれない。しかし、主要な祈りは厳格に定められており、決まり事に従って神を敬うことになっている。

> アッラーのほかに神はいない。
> ムハンマドは
> アッラーの使徒である。
> **シャハーダ**

イスラム教徒は1日に5回（夜明け前、正午、午後、日没後、夜）、祈りを捧げる。以前は、礼拝を主導するムアッズィンが、ミナレットというモスクの外にある高い塔の上からシャハーダを詠唱し、地元のイスラム教徒に対してモスクに集まるように促していた（現在でも場合によっては行われる）。今日では、ムアッズィンはマイクを使うことが多く、拡声器によって地域全体に聞こえるようになっている。予め録音された声が流されることもある。イスラム教徒は礼拝のためにモスクに出向くことが多いが、叶わない場合には、一人で、あるいは集団で、モスク以外の場所で祈ることも許されている。

礼拝の前には身を清めることになっており、これはムハンマドが「信仰の半分」と言ったとされているほど、重要である。5回の祈りの前に毎回、水で手を洗い、口をすすぎ、鼻孔を洗う。それから、顔全体を洗い、手首からひじまでを洗い、濡れた手で頭を触り、足と足首を洗う。それぞれの部分を何度清めるかは宗派によって異なる。定められた通りに身を清めた後、イスラム教において最も神聖な都市であるメッカの方角を向いて祈りを捧げる。モスクの壁には、ミフラーブというメッカの方角を示すくぼみがある。モスク

アブドゥッラー・イブン・ウマル

アブドゥッラー・イブン・ウマル・イブン・アル＝ハッターブは、ムハンマドの死後、イスラム共同体の2代目の指導者となったウマル1世の長男である。7世紀初頭に生まれ、父親と共にイスラム教に改宗した。ムハンマドの極めて近しい仲間（教友）であり、戦場でムハンマドの隣にいたことも何度かある。その高潔さと献身とで、尊敬を集めた。

最も重要なことは、イブン・ウマルがイスラム教の初期の歴史に関する権威の中で、最も信頼できる人物の一人だということである。ムハンマドや他の重要人物に近いところにいたために、彼は当時の情勢について広い知識を持っていた。彼はまた、ムハンマドのハディース（言行録）についても信頼できる情報を持っていた。84歳になろうという頃、メッカへ巡礼し、その地で693年に没している。